

---

# 林一家の団欒

春谷公彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

林一家の団欒

### 【Zコード】

Z8493Z

### 【作者名】

春谷公彦

### 【あらすじ】

娘の恋人が浮気をしたらしい。だが、証拠はなく、アリバイがあるらしい。まったく、アリバイなんて言葉、仕事以外で聞きたくない。息子よ、早く解決してなだめてくれ。

(前書き)

難易度低め

林浩司は夕食を終え、リビングのソファで新聞の朝刊を読んでいた。

林は朝に新聞を読まない。朝に新聞を読んでいる暇がないので、家に帰つて夕食を終えたあとで、夕刊と一緒にゆっくりと読むことにしている。重要なニュースならば、朝に付けっぱなしになつて、いるテレビの一ニュースを流し聞きするだけで事足りるので、仕事中の会話についていけないこともない。なので、現状が一番合理的だと林は思つている。

息子の潤平は一つあるソファのうち、林が座つていない方のソファに腰かけて、今流行りのクイズ番組を見ていた。中学生のころは、テレビの中の回答者よりも早く答えを言おうと意気揚々としていたものだが、最近は黙つて見ている。だが、頭の中ではほとんど正解しているのだろう。親馬鹿ではないが、潤平は賢い。おそらく自分よりも上だらう。

そんなとき、玄関のドアが閉められる音がした。長女の詩織が帰つてきたのだと分かつたが、やけに乱暴な閉め方だったのが気にかかつた。

そして、そのままリビングにも入らずに階段を上つていったようだ。ドタドタと大きな音を立てていた。

しばらくすると何のものだかわからぬが、二階から大きな音がし始めた。何かを投げつけているのだろうか。

「……なんか、荒れてるね」潤平が言った。

「ああ」林は、朝刊を読み終えて、夕刊を手に取った。

「このままだと……」

やがて物理的な音に混じつて、言い争いつゝ声が聞こえてきた。

ような、というよりはおそらく実際に言い争つてゐるはずだ。

夕刊を読み始めた林だったが、二階の騒動が気にかかるつて、なか

なか読み進められなかつた。ため息をついて夕刊をテーブルの上に置いた。

しばらくすると言い争いはなくなつたようだつた。そして、階段を下りる音が聞こえる。

「ああ、もう！ お姉ちゃんつるさい！」

リビングに入ってきたのは、高校三年生の次女、香織だった。林の子供は、上から大学三年生の潤平、大学一年生の詩織、そして香織の三人だ。

香織はいくつかの勉強道具を持つて下りてきた。彼女は今、受験の真っ最中である。センター試験まであと一ヶ月を切り、クリスマスも遊ばずに勉強していた。

香織は利かせたのか、潤平がテレビの電源を消した。香織は食卓の上で勉強を始めた。台所で洗い物をしている母の春香に詩織に対する愚痴を言つているようだ。

一階で大きな音がした。また何かを壁にぶつけたのだろうか。

「……潤平、なだめてこい」林は息子に言った。

自分が行つてもよいのだが、あの年頃の娘は父親の言うことをなかなか聞かないし、なかなか父親に相談したがらない。そう考えて林は敵前逃亡し、息子に後を託した。

「無理だよ」彼は苦笑している。

彼も同じようなことを考えているのだらう。だが、父親よりは兄の方が言うことを聞くはずだ。

「話だけでも聞いてやれ」

「無駄だと思うけどなあ」

そう言いながらも潤平は立ち上がりつてリビングを出していく。

彼が出て行つたあとで林はため息をついた。

「年頃の娘は難しい……」

「あなた、何もしてないじゃない」台所から妻のツツ「ヨミ」が入つた。

しばらくして、潤平がリビングに下りてきた。その表情は妹の愚

痴を聞いた疲労でも、面倒事を引き受けた苦笑でもなく、呆れとうのがふさわしかった。

「まったく、馬鹿みたいだ」

彼はそう言いつとドサツとソファに座りこんだ。

「何だつて？」

「彼氏に浮氣されたつてさ」

「浮氣つて……。大学一年でか？ ひよつこじやないか

「知らないよ。彼氏がしらばつくれてるらしいよ」

「認めるやつはいない」

「アリバイもあるんだつて」

「アリバイ？ 事件じゃないんだから。仕事以外でその言葉は聞きたくないな」

林は刑事である。刑事と言われると、よくテレビドラマで取り上げられるような捜査一課が想像されるのだが、林は窃盗などを扱う捜査三課の人間である。

「そう、詩織はわかつてないみたいだけど、アリバイなんてもんじやないよ」

「……ちょっと待て。それじゃあ、お前はわかつているみたいじゃないか」

「ただけど？」

「む、そうか……」

息子の潤平は頭の回転が速い。以前、事件について話をした時も、安楽椅子探偵のごとく聞いた話だけで犯人を当ててしまった。また、非公式に事件現場に連れて行つた時も、簡単に事件を解決してしまつたことがある。

彼にとって、この程度の話は事件でもなんでもないのかもしけない。

「何？ 聞きたいの？」

何を思ったのか潤平が尋ねてきた。正直、娘の痴話喧嘩などいつも良かつた。自由にやらせるのが我が家の方針である。もち

ろん、度が過ぎれば、奢めることはあるが。

「いや、別に」

（あなた、何もしてないじゃない）

先ほどの妻の言葉が脳裏を掠めた。

放任主義と言えば聞こえはいいが、全く関与しないのも、父親としていかがなものだろうか。林は少し迷った。

「あ、いや。ただ、父親として一応把握しておこうかな」

「そう。こんな話らしいよ」

潤平は詩織から聞いた話を語りだした。

香織がこちらを睨んで、母に耳栓を要求していた。

十一月二十六日月曜日。聞くところによると、国公立大学はどうやらクリスマス前から冬休みのようだが、この大学はこの日が最後の講義となっている。私立大学の休みは遅いし、明けるのも早い。非常に短い。詩織はその点について常々不満があつたが、今はそれどころではなかつた。

「ちょっと、どういうこと！？」詩織の叫びが講義室に響いた。

「ここは大学内でも大きな部類に入る講義室だ。それでも彼女にとつてそんなことはどうでもよかつた。ただただ、目の前にいる男を罵倒したくて仕方がなかつたのだ。

周りの学生は何事かと彼女の方を一瞥したが、そのほとんどがすぐ興味を失つて、それぞれのグループで会話を再開した。一部の人間はまだこちらを観察しているようだつたが、詩織にとつて、彼らは南瓜に見立てた観客よりもどうでもよい存在だつた。

「ちょ、ちょっと待てよ。何だよ急に？」詩織に詰め寄られている長身細身の男が言つ。

彼は矢島俊介といい、詩織と交際している。高校二年のころからの付き合いなので、かれこれ三年になる。

「あんた、イブはバイトだつて言つたじゃない！」

彼はコンビニ夜勤のアルバイトをしている。コンビニのアルバイトは基本給は安いが、夜勤は深夜手当がつくのでそこそこの給料になるし、何より楽だというのが彼の言い分だった。

だが、毎度毎度「眠い」と言われる詩織にとつては、彼のアルバイトはもとから気に入らなかつたのだ。それに加えて大切なクリスマス・イブはアルバイトが入つてゐるから会えないなどとなれば、不愉快極まりない。

もちろん、大学に入つて、詩織もアルバイトを始めたし、スケジュール管理の難しさは知つてゐた。なので、渋々それは受け入れるしかなかつたのだ。

それだけならば、納得できていたのに……。

「言つたよ。それは悪いって言つたじゃないか」またか、というような表情で彼は言つた。

それを見て、彼女の怒りはさらに高まつた。本当は頬にビンタでもしてやりたかったが、それは最終兵器として取つておくことにした。

「あんたねえ、イブに違う女といったとこ見たつて子がいるのよ！…それを聞いた時の驚きと怒りと悲しみはどうやつたつて表現できないだろう。そして、その怒りがパンケーキみみたいに膨張していく、今彼に矛先を向けているのだ。

「ちょ、え？ 人違いだろ」困惑した表情で彼は言う。

演技だ。彼女はそう思った。彼は昔から嘘をつくのが得意だった。教師が幾度となく騙されているのを彼女は見ていた。

それでも彼女自身が騙されることはなかつた。女の勘とでも言おうか、彼が嘘をついても、詩織は誤魔化されず、必ず結局は彼が平謝りすることになるのだ。

今回もそうだ。女の勘がそう言つてゐる。観念させてやる。

「嘘よ！ 私を騙そうとしたつて無駄よ。わかるんだから！」

「落ち着けつて。ちょっと待てよ。なあ、森山！」彼は近くの机に座つている男に声をかけた。

彼はイヤホンで音楽を聞きながら何かの本を読んでいたので、俊介の呼びかけに気が付かなかつたようだ。

「おい、森山」俊介は彼の肩をゆすつた。

そこで、やつと男は気が付いて、こちらを見た。イヤホンを外して、本を閉じた。TOIECの本だった。

「……何?」無表情で彼は言った。

彼女は彼のことを知つていた。

森山直樹。近所に住んでいる男だ。何の因果か、小学校から中学、高校まで、十五年間で、十年も同じクラスだった男だ。

俊介とは高校から一緒にだから、単純な年数で言えば、彼との付き合いの方が長い。クレープの生地よりも薄い付き合いではあるが。

だが、よくわからない男だ。無愛想とまでは言わないが、無口で理解しがたい。じぢらが話しかけない限り口を開こうとしない。そんなやつだ。

「なあ、お前、この間、俺と一緒にシフト入ったよな?」

「うん」彼は短く答える。

「二十四日は朝五時まで一緒にいたよな?」

「二十四日? うん」

「オッケ、サンキュー」

俊介がそういうと、森山は再びイヤホンをして本を読みだした。

「な? 言つたろ? 変な疑いよしてくれよ」彼は肩をすくめて言った。

詩織は信じられなかつた。森山は幼いころから正直者で通つていた。たいていは「うん」か「いや」しか答えないのだが、馬鹿みたいに正直だつた。何か悪戯が起つると、教師が森山のところに行つて、「見なかつたか?」と尋ねるのが常となつていたくらいである。

森山が俊介と共謀して嘘の証言をするなど考えにくかつた。そういったことは彼にとって最もくだらないでどうでもよい事柄なのだろうと思っていた。

彼女はそれでも信じられなくて森山の肩を叩いた。

「……何？」彼はイヤホンを外す。だが、本は閉じなかつた。

「ねえ、森山。」いつに嘘の証言しろとか言われてんでしょ？ そ  
うでしょ！？」

正直者の彼なら、いつ問えば、素直に白状するだろうと思つた。  
だが、帰ってきた答えは予想に反するものだつた。

「いや、違うよ」

「嘘……ほんとに言われてない？」

「うん」

彼は勝手にもう話は終わつたのだと判断したのか、イヤホンをつ  
けて本を読み始めた。

「だからさ、言つたら？ イブにバイト入つたのは悪いと思つてる  
からさ。機嫌直してくれよ」

その時、講義室の入り口から教授が入つてきて、席に着かざるを得  
なくなつた。最終兵器はお蔵入りとなつた。

「……ってわけ」

話しあると潤平は座つていたソファにさらに体重をかけて深く  
腰掛け直した。

「直樹君つて、そここの角の？」

林の記憶には中学生くらいまでの彼の記憶しかない。彼の父親と  
は何度か話したことはあるが、久しく会つていない。

「うん。僕、あの子苦手なんだよね。話しかけても『うん』か『い  
や』しか言わないし。まあ、最近は話してないけどね」

「単純に、直樹君が嘘をついているか、人違いだったかだろう  
話を聞いて林が出した結論だつた。何の面白みもない結果だ。娘  
の情事に面白みがあつても困るのだが。  
「人違いつていうのは、大いにあるよね」

「森山君が嘘をついているっていうのは？」潤平が人違いの方を強

調したので、林は気にかかつて尋ねた。

「まあ、なくはないけどね。最近は会ってないから、森山君がどういう感じになつてゐるかしらないしね。でも、詩織がそれなつて言つてる」

「わからんぞ。で、結局、結論はどうなんだ？」

「例えば、そうだね。これは聞いてなかつたんだけど、矢島君を見たつていう子が、まあ、女の子だつたと仮定しよう。で、その女の子が彼のことを好きで、別れさせようとしたとか」

「でも、それにはスケジュールを把握していないといけないだろ」「実際には二人でデートなどしてこよのものなら、計画は破たんしてしまつ。

「詩織のことだから、愚痴つてたんじゃない？『彼がイブにバイトだつて。信じらんないんだけど』とか

「だが、実際にバイトだつたわけだろ？　いや、それが議論の焦点なのか？」

「疑いをせることができるば御の字でしょ」

「なるほど……」

「他にも、本当にバイトだつたけど、バイトの前に女の子とデートしていたとか

「ああ……」

「まあ、それらもあり得るわけだけど。もつとしつくつ来る話があるんだ」

「何だそれは？」

「まあ、しつくつ来るつていうか。面白いといふ。ある前提と仮定が必要なんだ」

「何だ、前提と仮定つて？」

「ええと、第一に、矢島君が浮氣をしていたという前提。それと森山君が嘘をついていないという仮定。ついでに、矢島君が森山君に証言を依頼していないという仮定」

「そんなことあり得るのか？」

「そんなことあり得るのか？」

「あり得るよ。つまりね、バイトだったのは一・二十三日だったのさ」

「それじゃあ、直樹君が嘘をついていることになるだろ?」第一、

店に行つて聞けばすぐばれるだろ?」

「店に行つたつて、今は個人情報保護の最盛期だからね。教えてくれないよ。で、直樹君が嘘をついていることになるかつて話だけど。答えは、ならない。聞いたところによると、矢島君のバイトは夜九時から朝五時までらしいんだけど。一・二十三日だったのは最初の三時間だけで、残り五時間は一・二十四日だから。

十一時過ぎると、日付が変わるけど、その日を『明日』と呼ぶ人と『今日』って呼ぶ人がいるよね。森山君は後者で、その辺をしつかり区別する人だったのさ。逆に詩織は前者だつたってわけ。

ちなみに、コンビニでバイトをしている人は実は前者が多いんだよね。眠そうにしている人に『どうしたの?』って聞いたら、不思議なことにたいてい『昨日』バイトだったって答えるんだよ、

“今日”の時間がの方が長いのに。

けど、森山君はそうじやなかつた。コンビニでバイトしているのにね。

彼が尋ねられたのは『一・二十四日は朝五時まで一緒だつたか?』だから、シフトに入った時には一・二十三日だつたけど、朝五時はすでに一・二十四日だからね。だから、『一・二十四日?』って聞きなおしたんだよ。彼は頭の中でしつかりと日付をまたいでから答えたのさ。ある意味、正確で賢いよね

「だが、もし直樹君が、一・二十三日だと答えたらどうする気だつたんだ?」

「その辺は一緒に働いていればわかるよ。日付が変わった後の表現はだいたい、人によつて統一されているだろ?」から。森山君はかなり厳密に統一されていたんだろうね。

森山君は無口で、聞かれた質問にしか答えないけど、質問には正直に答えるから、『シフトは一・二十三日から一・二十四日にかけてだったか?』って聞けば正直に言うと思つよ。

そう、彼はイヤホンをして音楽を聴きながら本を読んでいたわけだから、話の文脈は理解していなかつたんだよ。本当に質問に答えただけつてこと。浮氣云々の話だつて知つてたら、あるいはちゃんと答えたかもしれないけど、どうだろう？ それでも質問以外には答えないのかな？」

「もう……まあ、いいか。詩織に教えてやらんのか？」

「詩織がどうしたいかによるね。追及して、懲らしめたり、別れたいつていうんなら教えるけど。まあ、聞かれるまでは黙つておくかな？」

「そうか。……そういえば、お前、一十四日は随分と帰りが遅かつたが？」

「え？ あー、そうバイト。バイトだよ」

「アリバイは？」

一瞬の沈黙の後、二人は声を上げて笑つた。  
食卓から、香織の怒鳴り声が聞こえてきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8493z/>

---

林一家の団欒

2011年12月26日21時51分発行